

教育研究創発機構第4回 公開研究会 リー先生発言要旨 及び シムさんの発言内容

本公開研究会においては、学校臨床センターの客員教授としていらした、クリスティン・リー先生と、東京大学大学院博士課程在籍のシムさんにシンガポールの教育について発表していただいた。リー先生は、シンガポールの唯一の教師の訓練・養成を行なっている National Institute of Education の教授で、社会科の指導が専門である。広くカリキュラム改革、授業研究、多文化教育、エスニックの問題など、学力と学習に関連した領域で研究をされている。シムさんは、荻谷先生、耳塚先生などと共に、日本とシンガポールの生徒の意識調査を行い、日本においては生徒の意欲に学校間格差が大きい、シンガポールにおいては下位校においても意欲が下がらないことを示唆した。

1990年代の終わりからの学力低下論、また、最近はOECDやIEAの国際テストにおいて日本の生徒の学力低下がマスコミによって話題になり、その中で高得点をあげてきたシンガポールの教育の紹介は、非常にタイムリーな話題となった。シンガポールは前回のIEAのTIMSSでも高順位に位置付き、その算数指導は特に、国際的モデルとして使用されている。アメリカなどでもシンガポールの算数の教科書がネットで販売され、郡によってはそれを教科書に使うようなことも起きている。

また、コメンテーターは、学力低下論争でも活発に発言され、シンガポールの生徒意識調査をも行った荻谷剛彦先生であった。荻谷先生は、学校臨床センターの上位組織、教育開発機構のセンター長である。

リー先生はまず、シンガポール教育省によって作られたシンガポールの教育のビデオを上映された。多民族の中で、新時代にあった、活動的で優れた国民を形成していくというメッセージを視覚的に伝えるものであった。グローバル社会に対応するIT、しかし、同時に忘れられてはいけない道徳心、保護者との連携、社会への奉仕活動をしている生徒の映像などが映された。途中、軍隊の映像が映り、なぜ学校教育の宣伝に軍隊が映るのかという日本人側からの質問に、シムさんからは、シンガポールには男子に兵役があり、中学校の部活にはどこでも少年軍隊や少年警察隊があるなどの話があった。

続き、リー先生は、「考える学校、学ぶ国家」(Thinking Schools Learning Nation)という、シンガポールの教育政策について話され、「考える力」を育成する、日本流に言えば新学力の改革路線が今日まで続いていることを説明された。また、頭脳だけでなく、心も、よき国民の形成を促すため、全人教育志向が政策として強まってきたこと、シンガポールにおいては、教育が投資として、資金が投入され、国家の重要課題になっていることが力説された(例 2003年にGDPの3.8パーセントが教育に投資されて、それは防衛費に続く額である)。前首相の言葉が引用され、卓越さ、すべての学校においてそれを目指すということがシンガポールの教育をまとめるコンセプトであると説明された。競争的なシステムであり、国際コンペティションでも非常に高い成果を上げてきたことも紹介された。こうした競技が好まれ

るという説明もあった。

リー先生によると、シンガポールの教育改革には三つのフェーズがある。最初、植民地から独立した時点においてはサバイバルモードで、要するにすべての子供たちが学校に通っているだけでなく、とにかくサバイバルしていくことが課題であった。その次、今度は効率性を強調した段階へと入っていく。そして今、第3の段階に入っているという。そこでは、一つのサイズがすべての子供たちに合っているという時代は終わっている。いろいろな子供たちに合わせる、能力ベースの教育が目指されるのである。しかし、それは狭い意味ではなく、全人的に子供をとらえて、人格教育なども組み入れた能力ベースの段階に入っているとリー先生は説明された。一例として、個々に対応するという観点から2005年から低学年の、小学校の1、2年において40人学級が30人学級になる。これは低学年において独特の、よりケアを必要とするような指導をしやすくする。

続き、シンガポールが中央集権的で国家カリキュラムを持っていること、共通カリキュラムを教える教授用語が英語であり、それが多民族に公平であり、グローバル社会のニーズにも応えるものとして理解されていること、教育省が全シラバスを掌握して、ある種の画一性、ある種の統一性、そしてスタート時点から教育省によるスタンダードな基準が決められたシステムであることが紹介された。また、能力別トラックが早くから導入され、プライマリー4、小学校4年生、9歳の終わりから、EM1、EM2、EM3の三つの能力別ストリームに分けられて、EM1が英語と母語が共にハイレベルで教え、EM2が英語はハイレベルだが母語は少しレベルが落ち、EM3が両方とも基礎レベルであるというかたちになっているとの説明があった。今年から改革され、EM1とEM2が合併されたことが付け加えられた。

(ここで、EM1とEM2はもともとあまり変わらなく、母語が違うだけであり、EM3が一番下位の人たち、15パーセントぐらい残っているとのシムさんの発言があった)。こうした能力別ストリームに関しては、かつてほど厳しく仕分けしたとらえかたではなく、融通がきくようになってきたことの説明があった。そして、それ以後も、厳しい試験によって振り分けられていくシンガポールのシステムの制度について説明があった(図参照 高校へのOレベル、高等教育へのAレベル)。また、エリートのための中高一貫校の設立についても言及があった。

リー先生は次に、大学の入学資格、また、教師訓練においても、規制緩和が進んでいることを紹介された。例えば、以前は教師になるにはAレベルの資格がないとだめであったのが、ポリテクニクの学位で受けるというかたちがどんどん増えている。その背後には、かなり優秀な生徒たちがポリテクニクに行く、大学に入らなければオーストラリアなどの海外の大学に行ってしまうという現状があるという。優秀なポリテクニクの生徒にとって魅力を持つために、シンガポールの大学にプレッシャーがかかっているとリー先生は説明されていた。例えば、オーストラリアに行くほうが年限が少なくすみ、シンガポールの大学に期間短縮への圧力がかかる。海外の大学がシンガポールに進出し、競争相手になっているという。

こうした能力別に早くから振り分けられる能力別ストリームの次に、リー先生は、バイリンガル教育をシンガポールの教育の特徴としてあげられた。生徒は英語と母語の両方を学ぶことを期待されているという。シンガポールの人たちは非常に現実的であり、英語は国際社会への窓であり、市場経済の言語であり、教授用語であるとして、正当性を与えられていると言う。一方、母語は文化的な価値というものを伝達するために必要であるとされている。伝統の担い手である高齢者の中には必ずしも英語を流暢にしゃべる人ばかりではないという話も出た。バイリンガル教育に関しては、かつてはかなり厳しい政策がとられ、算数や理科が非常に良くても、自分の母語が例えば中国語だとすると、それが良くないと大学に進学できず、海外流出の一因にもなっていたこと、それが規制緩和されつつあることが紹介された。初等教育終了試験であるP S L E (Primary School Leaving Examination) の試験でも、四つの試験科目があり、英語と理科と算数と自分の母語というかたちで、どれも同じように同等に評価されてきたことが紹介された。従って母語以外が全部良い場合でも、母語が悪いとチャンスが狭まっていくということになる矛盾があることが紹介された。リー先生ご自身の子どもも、母語が得意ではなく、家庭教師をつけて対応したことなどの体験談も紹介された。しかし、これに関しても、国際化に伴って海外駐在員が増え、そうした子どもへの特別例外規定ができたり、学習障害の場合など、規制緩和が進んでいることも紹介された。

学力におけるメリトクラシー、バイリンガル教育と多民族の調和、国民が身に付けることを期待される道徳心、そして、考える力など、中央集権的に明示されている国であることが印象付けられた。

次にカリキュラムについての議論となり、90年代に登場した「考える学校、学ぶ国家」で日本と同じように内容が削減されていった経緯が紹介された。内容が非常に多いと、それだけプロセスとか「考える力」を養う時間が減っていくとされ、より少なく教えてより多くを学ぶ、「ティーチ・レス・ラーン・モア」(Teach Less Learn More)などとも言われたという。

そして、内容を削減して教える方法を変える場合、出口の試験が変わらなければ変わらないとして、評価にもそれを反映させようとしてきた。「考える力」を強調しようと、歴史で言えば、資料を基にして考えさせる、そうした問題が試験にも出るような方向性があったという。プロジェクトワークが新しい教育として導入され、一例として、大学入学の際にも考慮されるようになっている。創造性、問題解決思考の育成に役立つとされるこうしたプロジェクトワークや、協同学習、自己反省的な能力、生涯学習能力、こうしたものを視野に入れたタイプの活動が増えた。情報教育も今の時代の必要不可欠なものとされ、2人の生徒につきコンピューターが1台導入され、学校が全部インターネットにつながり、30パーセントのカリキュラムがITを何らかの方法で活用することになっているという。

こうした勉強面での向上、ITの強調などと共に、シンガポール人としてのアイデンティティーであるとか、誇りだとか、シンガポールの歴史を知る、シンガポールがどのようなことに直面しているか、どのような課題を乗り越えなければいけないのかとか、そうしたこと

を理解して、そしてコアバリューズ、道徳的な中心的価値ですよね、そういったものを身に着けていくことも同時に強調されている。ナショナルエデュケーション、シンガポール人としての自覚を育てることも教育の重要な使命であり、フィールドトリップに行ったり、顕著な歴史的イベントをたたえたりとか、地域活動などを通して修得するなど、体験的なものも多く取り入れられている。ナショナルエデュケーションはもともとはテストになく、学校によって軽視される傾向があったとリー先生は述べている。ところが今、学校がどのようにランク付けをされるかに指標が変わってきて、社会的な面、社会性を含めた指標になっているために、ナショナルエデュケーションをどのように学校が見るかも変わってきたという。

さらに、ペダゴジーにおける新しい試みの一つとして、私立セクターによって担われている就学前から小学校以後の公立システムへと適応をスムーズにし、より連携を深めていく中で、3歳から7歳というのを一つのスパンとして考えて連携を強めようとしているSEED (Strategies for Effective Engagement and Development) プロジェクトが紹介された。さらに、「考える力」を強調したSAIL (Strategies for Active and Independent Learning) では、目指しているというものを明示して、それで細かくフィードバックしていくサイクルが示され、プロセスの中に学びを位置付けている。SAILの「考える力」は今パイロット段階が3年間シンガポールで行われて、そこから波及させようとしているという。

個別的なことでは、IT国家を目指しているシンガポールでは、前述のようにIT教育に力が入られ、IEAの評価でも28カ国の中でITのマスタープランがシンガポールは非常に優れていると評価されてきた。それで例えば、例として小学校においてデジタル芸術とか、物理とか理科系においても高校においてその概念を教える際にITを活用するというのもしている。学習が遅れている生徒にも、コーディネーターみたいなものを付けて、基礎学力、基礎的なリテラシーとか計算能力とかを補助している。

一般に、実験的な試みというものが高く評価されている。それは単なる教育省主導のものだけでなく、学校が持ち込んで、それをSEEDプロジェクトとして予算化してもらって、それでやるなどの方向性をとっている。NIEのほうでもペダゴジーと実践というセンターを作って、そうした非常に創造的な実験を行なおうとしている。

規制緩和の方向性が見られ、スペシャライズト・インディペンデント・スクールとしては、例えばスポーツに特化しているスポーツ・スクールとか、芸術に特化しているアーツ・スクールとか、数学と理科に特化しているマス・アンド・サイエンス・スクールの学校も登場している。それから、民間の資金によってファンドされている、財政的に保証されているような私立学校が出てきている。

教育改革を支えるのは教師の質であるが、NIEは唯一の教師養成機関であるため、すべての教師はそこに来る。校長研修などもそこで行う。国家による支援が手厚く、さまざまなキャリアの選択肢もあるという。キャリアトラックに乗って校長先生になることもできるし、先生の中でもマスターティーチャーを目指すこともできる。あと、カリキュラムのスペ

シャリストを目指すこともできるし、企業に研修に行って戻ってくるオプションもある。それから、今年学級数を減らすのに対応して教育省が更に3千人の教師を新規養成して、それをNIEに送るといった話があったと説明された。非常に体系的に教師の訓練をしている。

しかしながら、リー先生によると、今後シンガポールが直面しなくてはならないいろいろな課題もあると考えられている。シンガポールは小さな国家であり、今は非常に繁栄しているけれども、5年後どうなるか分からないという危機感がシンガポール側にはある。例えば、中国からの競争だとか、さまざまなグローバルの競争の中でどういうふうに勝ち残れるのか。そこで、シンガポールは今までよりも創造的に作り出せていくような資質を持った優秀で、そして自らに自信を持っているような、そのような働き手をつくっていかなければ駄目だということになっている。都市国家であり、家族というものに対して、非常にプレッシャーがかかるという話もされた。10年間で離婚率が上がっていく。特に子供を産む年齢の女性層というものに、それが見られる。働く女性も多い、両親そろって働くために両親が家庭に不在になって、子供がメイドによって育てられるという例も少なくないという。そして、そこに書いてあるようにメイドによって育てられている子供が、2000年の調査によって60パーセントが、主たる社会の担い手になっているということであった。(?)

こうした状況の中、従って、学力だけでなく価値、それもシンガポール人としての価値だとか道徳や人格形成なども教育の中で組み込んでいく必要性が求められてきた。

それから、階層がほかほど高くない子供たちで、その人たちの学力を保障するというのも課題である。海外からの移住者、例えば中国の人たちなどをいかに統合していくか。そのようなことも課題となっている。

保護者の教育熱も上がり、日本の塾にあたるテュイションセンターが拡大している。99年から2003年で、86.6パーセントの勢いで増えているということですね。そうした所に引退した先生などが教えるようになっている。こうした民のセクターをどう考えるか。

それから、そこに書いてあるように英語しか家でもしゃべらない家庭が、特に一定以上の層で増えている。それで、母語の教育をどうするのかも課題となっている。理科特化のハイスクールだとか、中高一貫プログラムだとか、民間の資本による学校なども特定階層以上の人々が主たる関係層である。だれがこういった所に入れるのかということ考えたときに、やはり機会均等の問題が出てくる。外国人教育、機会均等、社会変動の中でこうしたことをシンガポールは模索している。能力ベースのシステムを前提とした質の確保、多民族間の平等、競争的な市場的改革と考える力、シンガポール人としての自覚など、シンガポールの教育が動いているいくつかの軸を中心に講演がなされた。

以上

シム はい、よろしくお願いします。教育学研究科博士課程のシムです。まず、僕のスタンスを紹介させていただきますと、シンガポールの教育に関してはもともと非常にクリティカルでした。しかし東大でいろいろ比較研究をやっているうちに、何か日本の教育制度に比べると、まだシンガポールのほうがうまくやっているなあという印象を受けて、最近いろいろと見直しているところです。先程リー先生が言ったように、シンガポールは毎年目まぐるしく、いろいろ改革をやっていますけれども、でも大体エリートたちのための改革が多いような印象を受けます。

ですから、今日、私の発表のタイトルはあえて、フォーカシング・オン・スクールズ・ウィズ・ロー・プレステージ、つまり選抜度の低い学校に焦点を置きました。もちろん日本とシンガポールの学校ですけども、そこでの教育がどうなっているのだろうというのが問題の関心です。目的としては、先程言ったように、そこで行われる教育のインプット・スループット・アウトプットの分析、および両国のメリトクラシーの在り方を比較することです。

シム シンガポールの算数は日本の1.5倍という、でかい広告看板がありますけど、ご覧になったことがありますか。それは栄光ゼミナールという学習塾が出したもので、つまり日本の生徒がいかに勉強しないということを印象付けるために使われた広告なんですけども、そういうシンガポールの教育制度が最近非常に注目を浴びています。

両国の共通点として「アジアの奇跡」と呼ばれたことがある国です。シンガポールでも高度成長期は既に終わって、今は不景気じゃないけれども、一昔前の元気はなくなっています。もちろん言うまでもなく天然資源に乏しい。シンガポールは水まで輸入していますので何もありません。だから人間が富を構築していくしかないのです。唯一の資源が人的資源。これはシンガポール人だれでも認識しています。これも先程言った国民教育の一環です。

それで、日本と同じようにメリトクラシー、先程メリトクラシーという言葉がいっぱい出たんですけど、これが教育の土台となっています。先程も言ったように、日本も高かったんですけどもシンガポールの生徒の学力も世界1位か2位となっているようです。

なぜ下位校？従来の研究では学校選抜度と階層の強い関連性がいっぱい指摘されてきました。でもどの国を調査しても、エリート校には階層の高い人が行って、下位校、選抜度の低い学校には出身階層の低い人が集まる。それは多分驚きでもなかりょう。

ただ、僕のスタンスとしては、エリートはほうっといても勉強はする。だから重要なのは、

いかに、下位学校の生徒たちに意欲をつけるのかが課題であろうと私は思います。

日本の下位校はいろんなことを言われてきました。まず、日本のメリトクラシーが衰退しているという指摘を多くの研究がしています。それで、それも階層の低い人たちから、あと学力の低い学校からその崩れが見え始めています。下位校の生徒は勉強しないということが、ほぼ最近常識になっているぐらいですね。一方、シンガポールの下位校、僕の調査ではメリトクラシーの規範が維持されていて、レッテルが張られているのに学習意欲が高いということが明らかになっています。

なぜかと。先行研究で、いろんな先生が、荻谷先生も含めていろんな研究をなさっていますけれども、両国の上位校の生徒はエリートだからほとんど勉強している。日本のエリート校もみんな勉強しています。僕たちの調査によると、シンガポールよりも日本のほうがより勉強しているのです。だからエリートは心配しなくてもいいと思います。

しかし一方、両国の下位校は雲泥の差が見られました。それで、シンガポールを比較の鏡として日本のヒントになるものはないのかということが、私の今日の発表の出発点です。じゃ、先程も出てきましたが、シンガポールの下位校はどんな学校でしょう。

違う、まず課題ですね。インプットとといいますと、どのような生徒がどのような動機を持って下位校に入学するのか。スループットとして、学校の授業や先生について生徒たちはどう考えているのか。アウトプットも二つの指標がありまして、一つは生徒の進路希望に見られる教育アスピレーション、もう一つは学習意欲です。

シンガポールの下位校の紹介です。もうだれが見ても、これが下位校だろうというのがシンガポールの、インスティテュート・オブ・テクニカル・エデュケーション、ITEです。昔映画で揶揄の対象とされたことがあって、ITEは「イツ・ジ・エンド」の略だと言われたことがありました。つまりそこに行けばもう終わりだということが社会的な常識だったのです。

そこは同じコホートの25パーセントの中卒者を受け入れています。シンガポールの4人に1人はITEへ行っています。僕たちの調査では人種は聞かなかったのですが、でもITEのキャンパスに入るとマレー系とインド系が非常に多いことがすぐお分かりになると思います。生徒たちのほとんどは、エリート校であるジュニアカレッジやポリテクニックへの入学資格さえ持たない、Oレベルが5科目に足りない人が多いのです。

これは先程リー先生も言ったように、シンガポールの教育制度ですけども、簡単に言いますと、まず小学校ではEM1、2、3があります。大体割合としては15・70・15パーセントになっています。多くの人は中間層に入っています。中学教育はスペシャル、急行、ノーマル・アカデミック、ノーマル・テクニカルとありますけども、入学者の割合はそれぞれ10パーセント・50パーセント・25パーセント・15パーセントとなっています。中学校を卒業したら、同コホートの25パーセントは技術教育校へ、40パーセントはポリテクニクへ、そして25%はジュニアカレッジへ進学します。残りの10パーセントは中卒のまま就職したり、商売をやったり、軍隊に入ったりするのでしょう。

先程指摘したように、トラック間のモビリティはあるんですけども、僕たちの調査によると、ほとんどそれは実現されていない。つまり敗者復活が非常に難しい、小中学校では。なぜかといいますと、トラック間のカリキュラム自体が違うので、復活しようにも余程猛勉強しないと上がることは非常に難しいです。先程、イツ・ジ・エンドと言われたITEというのは、ほとんどがノーマルテクニカル、一番下位のトラックから来る人が多くて、このノーマルテクニカルの中学生のほとんども小学校ではEM3コースの生徒なのです。つまり9歳そこそこで人生が決まってしまう。恐ろしいシナリオがシンガポールにはあります。

シンガポールのITEの生徒のプロフィールといいますと、多くは小中学校の上位校や上位コースとは無縁です。だから、最近のシンガポールの改革は下位には全然影響しません。出身階層も低い。ところが調査によりますと、ITE入学後にそれまで低かったアスピレーションが上昇します。学習にも時間を費やすようになります。表で示すと、教育年数に基づく進学アスピレーションの変化は赤線がJC、ジュニアカレッジ、エリート校、最初からもう高いですね。ブルーのほうがITE、最初は非常に低かったんですけど中学校から現在にかけて急激に上昇することが見られます。

その背景として、僕たちは質問調査紙や、あと学校訪問したり、生徒たちのいろいろな話を聞いて、こういうことが判明しました。まずITEは卒業生や企業を調査し、将来の仕事の中身と合うようにカリキュラムや指導方法を常に見直しています。シンガポールのどこの学校もやっていることです。下位校でもやっています。ITEの教師も、勉強の重要性を強く説き、卒業生の進路や「サクセス・ストーリー」と生徒に年に4回ぐらい配っています。

これは一つの例ですけども、フランク・シナトラの「マイウェイ」という歌から取った歌詞、「アイ・ディド・イット・マイウェイ」というタイトルをもつ冊子を生徒に配るわけです。学力は低いものの、こんな立派な先輩がいっぱいいますよというメッセージです。

もちろん、日本の下位校にも卒業したOBを招待して話をさせるということをやっていると思いますが、数的にはI T Eのほうが完全に高いですね。こんなにもたくさんサクセスを手に入れた先輩がいるぞというメッセージは強烈です。回しましょうか。

あと、シンガポールの学校はほとんど国立なので、I T Eからポリテクへ、ポリテクから大学へという敗者復活のルートもはっきりしています。

シンガポールのメリトクラシーの特徴として、まず小学校5年生でアカデミックなルートに適さない人を早期に選び出し、彼らに技術能力を、つまり中学校では既にもうテクニカルコースに入れて、それを基準とする別の競争ルートを提供しています。それによって、彼らの学習意欲を再燃させ、メリトクラシーを維持しているわけです。

一方、日本の下位校、今までの研究はアウトプットが中心でした。つまり学習意欲とかアスピレーションとかが中心だったのですけれども、それでは学校の中で何が問われているか。あと、どういう生徒が入学して、どのような動機を持って入学しているのかという研究がほとんどありませんでした。それから、従来の研究によりますと、日本の下位校にも勉強する者が全くいないわけではない。いることはいます。それでは、勉強する生徒・しない生徒を分けているのは何なのか。階層なのか、それともほかの要因があるのでしょうかということです。

調査方法として、これは2年前に行われた調査です。I T Eの生徒、ほぼ600人ぐらい。比較対象としてエリートが400人ぐらい。全部、シンガポールは非常にI Tが発達していますので、すべてインターネットで質問紙調査していました。すぐに回答が返ってきたのが非常に良かったですね。

日本の場合、それも東北のある県、非常に教育に熱心な県を調査対象としました。今回、下位校と上位校しか選んでいません、分析に。専門学科下位校ほぼ200人、普通科下位校ほぼ200人、あと比較対象としてエリート校ほぼ230人ぐらいです。方法はコンピューターではなくて、普通に質問紙による集団自記式調査を行いました。

分析その1、インプットのほう。まず、タイトルは「ダブルチャンスのシンガポール下位校・バーサス・ノーチャンスの日本下位校」。なぜかと、今説明します。インプットとしてまずは二つの指標を見ます。中学校の時の成績と出身階層です。まず成績、日本側が赤でシンガポールが緑です。一目瞭然、両国において上位というのは1パーセントしかありません。特に日本のほうの差は恐ろしいほど大きいです。下位のほうがほとんどを占めています。こ

れは驚きではなかろう、下位ですからね。

父職、ホワイトカラーか、そうでないかに対して、いずれの国もホワイトカラーの仕事を持っている父を持つ生徒は、上位校で倍になっています。ただ、ここで注目したいのは、なぜか日本の場合無回答が多いのです。つまりお父さんが何の仕事をしているのかさえ知らないかもしれないということですね。特に下位校では非常に無回答が多い。親が何をしているのかさえも知らない生徒がいるのかなと私は思います。

学歴のほうについては、パーセンテージが違うのは教育制度のせいもありますけれども、日本とシンガポールの両国とも、上位・下位校間の差が非常に大きいです。また、日本のほうの無回答が多い。

まとめてみますと、インプットにおいて上・下位校間の学力差は一目瞭然。下位校生徒の出身階層はいずれの国においても低い。これは昔のシンガポールのリー・クワン・ユー首相の言葉を借りれば、「イツ・ア・ファクト・オブ・ライフ、アンド・ユー・キャント・チェンジ・イット」(It's a fact of life and you can't change it)、それは人生の現実だ、だれにも変えることはできない。

彼は、シンガポールはいかにウルトラメリトクラシーと言われても、シンガポールの階層差を直すことができなかった。そのことについてどう思いますかと聞かれた時に、こういう回答が出てきました。しかしシンガポールはメリトクラシーを持って、階層間を縮小しようと努めています。完全になくすことはないと認識しつつも、縮小させる方向に動いているのが現実です。

次、入学動機。なぜ、この学校に入ったのか。「成績と合っていました」。それは専門下とI T Eで非常に高い。成績がこれぐらいしかないので入るしかない。あと、「進学に有利」というのはI T Eで高いです。日本の下位校、特に専門学科下位校は進学させる機関ではないということ、日本の生徒も認識しているということです。

次に、「産業が求める知識を教えてくれる」、「職業選択の幅を広げてくれる」というのも、シンガポールのほうで9割あったのに対して日本の場合非常に低いです。特に専門学科は専門学科にもかかわらず、6割しか肯定的な回答はなかったのです。「授業内容が自分の興味関心に合っている」というのもシンガポールで高い。

私、先程「ダブルチャンス」と言ったのは、シンガポールの場合、進学に有利であるだけ

ではなく、産業の知識も教えてくれる、自分の幅も広げてくれる。つまり、進学にしても就職にしてもダブルチャンスがあるということです。しかし一方、日本の場合、進学に有利ではないし、それでいて産業の知識も教えてくれない。だからノーチャンスと名付けました。

先程、入学動機について、その生徒たちの期待と構えが異なる。それはもちろん教育制度によってもたらされることになるんですけど、シンガポールはダブルチャンス、日本はノーチャンスだと私は思います。

ですから日本下位校のように、インセンティブ不在では勉強する生徒がいたほうが不思議だと私は思うんですけども、意欲が低いのもごもっともかもしれません。

次にスループット。サブタイトルは、「元気なシンガポール下位校バーサス元気のない日本の下位校」。なぜでしょう。まず、学校での学習。「授業が面白い」、シンガポールで高いのに対して、日本では低い。「自分で考えたり、調べたり、問題を解決する授業が多い」。それも非常に大きなギャップがあります。

最後の3問は先生について聞くことです。まず、「先生も勉強が重要だと強調している」、「先生は私が良い成績を取ることを期待している」、「先生は学問的に優れている」。そのいずれにおいても、シンガポールと日本の間には大きな差が見られます。つまり私が思うのは、日本の授業が面白くないだけではなく、先生も元気に欠けているような印象すら受けます。

分析の3、アウトプット。「学習意欲の高いシンガポール下位校生徒バーサス低い日本下位校生徒」。まず、進学希望先の変化を見てみましょう。日本の場合、左側は普通科下位校、右側は専門科下位校です。ご覧の通り、日本の場合も小学校の時点から下位校において大学を目指す生徒の比率が非常に低いことが分かる。高校まで、赤線なんですけど、どんどん減っていくにつれて、短大や専門学校を目指す生徒がだんだん増えていく。しかし、ここで強調したいのは4年制大学を目指す人は非常に低い。特に専門学科の場合は、中学校の時点で既に4年制大学をあきらめた人が多い。

この図を教育年数で見ますと、あとシンガポールのほうと比べてみますと、こういうものが出てきました。点線がシンガポールのほうです。まず、赤いトライアングルなんですけど、これは両国のエリート校です。本当に放っておいてもアスピレーションは高いですね、何もなくても。しかし一方、下位校では、シンガポールのほうは最初から、小学校からトラッキングがありましたので、一番下位に振り分けられたI T Eの生徒は本当に最初からアスピレーションが低かったのですが、だんだん上昇していきます。それに対して、日本の場合は

最初から最後までほぼ直線ですね。上昇が見られませんでした。

それで、家での勉強時間。家で勉強をするかどうかということなんですけども、シンガポールの場合8割以上が家で勉強している、毎日勉強している。日本の場合、逆に勉強しないのが7割近くいました。全く勉強しないです。

家で勉強する生徒としない生徒と分けているのは何だろうと思ってロジスティック回帰分析を行いました。従属変数というのは家で勉強するかどうかです。独立変数として、男子ダミー、父・母の学歴、父・母の仕事、経済的豊かさ、現在成績、中3時成績、シンガポールの場合は中学校トラック、進学するかどうか、入学動機1、入学動機2、授業面白い、先生優れている。そういう変数を入れて行いました。

まず日本の場合、何と、下位校に絞って分析しても父職が有意な影響を与えていることが分かります。つまり、父職がホワイトカラーのほうが家で勉強する確率が高くなります。両国において、進学アスピレーションを持つ生徒がより勉強する。入学動機としては、日本では有意ではないものの、シンガポールの場合は自分の成績にマッチしていた、つまり、自分の成績の位置付けを分かっていた人が、あとから家で勉強するようになります。

余談ですが、シンガポールの場合なぜか男子が絶対に有意になってくる。つまり女子のほうが勉強しています。私としても、ちょっと男子としても頑張らないと、と思いますけども。いろんな推測ができますけども、ここでは話をしません。

最後に注目していただきたいのは、ほかの変数を統制したうえでも、授業を面白いと思う生徒ほど、あと、先生が優れていると思う人ほど、家で勉強する確率が高くなることです。

つまり、シンガポールと同じように日本の場合もいろんな教育投資をして授業が面白くなるように工夫すれば、あと、先生も訓練などを通してスキルアップしていれば、日本もシンガポール下位校みたいにじゅうぶんに生徒の学習意欲を高めることは可能であろうと私は思います。ただし今問題なのは、授業が面白いと思う生徒が少ないことですね。

日本の下位校についての結論は、まずインプットして、出身階層が低いうえにノーチャンス、チャンスを与えていない。それから、先程も言ったように下位校生徒の進学先というのは短大や専門学校が主です。日本の場合、それはほとんど私立教育機関ですね。つまり学費が高い短大や専門学校に、出身階層の低い者が入学するのです。しかしシンガポールの場合、ITE生徒のほとんどの進学先は国立のポリテクですので、学費は非常に低い。つまり、シン

ガポールの下位階層の人たちがより保護されていると私は思います。下位階層に手厚いということですね。

それでスループット、今度改めて、日本下位校の元気のなさが印象付けられました。スループットが低ければ、もちろんアウトプットも低いだらうという、簡単な方程式なんですけども、それはそのままですね。日本下位校生徒のアスピレーションも学習意欲も非常に低い。昨今言われているフリーターとか「ニート」の問題も、この日本下位校の問題と通底していると私は思います。

日本下位校の生徒のアスピレーションはクールアウトさせられているどころか、多分レフトアウトされていると私は思います。つまりのけ者、一人でなんとかするしかないということになってしまっている。

しかし先程言ったように、スルーアウトの向上はアウトプットにも寄与しますので、日本も根本的な改革を行えば、生徒の関心・意欲を高めることはじゅうぶんに可能です。ですから、下位校への投資と改革が急務となるべきだと私は思います。なぜなら、下位校の在り方というのは意欲の低い若者の問題だけではなく、階層間不平等の問題、ひいては日本の将来にも関係する問題であろうと私は思います。

短かったのですが、終わりです。ありがとうございました。(拍手)

苅谷 ありがとうございました。それでは、このあとは皆さんからいろいろご質問やディスカッション、いろいろコメントがあると思いますので、私は司会者の特権で、ディスカッションのためにはここを降りて、皆さん……。いや、だから司会者になっちゃったわけ、司会者としてまずは皆さんからの質問を受けて、最後のところで少しコメントとして申し上げます。

ですから、お二人の発表でいろいろと、ほかの国の教育制度の問題があったり、調査の結果なんかが出てきましたので、多分いろいろと事実レベルのことについても確認したい質問とか、あるいはもう少し内容に突っ込んだ、ここはどうなっているのかみたいなご質問やご意見があると思いますので、これから少しの時間、皆さんと議論ができればと思います。まず、ご質問やコメントがある方は、お名前とご所属を最初に言っていただいて、それでお願いできればと思います。では、どうぞご自由にどなたでも。じゃ、お願いします。日本語でも英語でも、どちらでも、英語でやって日本語に自分で直す。それが契機になるかもしれない。はい、お願いします。

―― 日本語でやります。教育心理学後期におりまして、このCOEのアシスタントをやっています。すごく面白い話だったのですが、ちょっとお伺いしたいのは、どういう質的な授業に差があるか。それは以前いろいろな授業を見ている方にお聞きしたいのですが、リー先生の話の聞いた時にどうも方向性はけっこう日本と似ている。「考える力」を育成するとか、でもこれだけ意欲に差があって、かつ授業が面白くないと言っている。それはいったいどういう質的な差があるのか。もし何かそれに対して分かっていることがあれば教えていただきたいなど。先生方、見ていらっしゃった先生がいらっしゃると思うので教えていただきたい。

荻谷 小学校、中学校、高校、どこでもいいから、授業の質の違いがどこにあるのか。

―― はい、少しでもヒントがあれば、お願いします。

市川 関連していいですか。今のデータでも・・・。

荻谷 お名前をどうぞ。(笑い)

市川 教育心理学の市川です。私もシンガポールの小学校や中学校の授業を見てきたのですが、今のデータを見ても、小学校や中学校の違いというより、驚いたのは高校での違い。私は、シンガポール、これだけみんながよく勉強しているのに大学の進学率はそんなに高くない、20パーセントぐらい。日本ではもう40パーセント以上になって、これが逆に良くないことを随分及ぼしているのではないかと。

つまり、アカデミックなことでもどんどん引っ張っていかうとしていますよね。学歴としてもかなり高いものを求める、大学卒を望む。そのためには普通科高校に行く。普通科高校に行くと、普通のカリキュラム、アカデミックなカリキュラムをあまり勉強の好きでない子にもやらせようとする。

今のシンガポールの場合では高校になると、かなり自分の将来に結び付いた関係あることを学べるようになる。ですから、僕は高校を見てないので分からないんですけど、これは前も耳塚先生が新聞でもあのデータを、一緒にやっていたらと思うんですけど、そのデータでびっくりしたのは、高校生がこれだけ意欲を出すにはアカデミックなことでも無理に引っ張らずに、自分の将来に関係するような勉強内容に変えていくことは、一つのモチベーションの原因かなと思いました。その辺りについて伺えれば。

荻谷 リー先生に最初に答えていただけますでしょうか。

リー (英語による発言)

恒吉 今の質問に対して、日本の授業といっても浜乃郷と大久保だけだということでも小学校ですよね。ただ一つすごく気が付いたことは、日本にコンピューターがないという。その学校だけかと思うけど、って、そうじゃないですが。それで、ただ拝見したのは研究授業ですし、また非常に子供中心的で、教師と子供たちの関係が非常にいい、きずなを大切にしているような、そういった状況を見て、ぜひその学んだことを持って帰りたい。そういう視点でご覧になっていますからね。

シンガポールの場合は、2千人規模の、そこに平均70人ぐらいの先生方で、それに顔と顔の関係が見えない関係みたいなものが非常に大きな問題だというふうに、リー先生は前からおっしゃっていますね。それで、日本に非常にきずなの強い、関係の強いそういったものを見て、ぜひそうしたモデルをシンガポールに持って帰りたいということと。

それから、今シムさんのあれで出たことが、方向性として、小学校でもスペシャリストを、全部を、全教科を担うのではなくて、特に戦略的な教科である、シンガポールは非常に国家戦略的に動機付けられているという話をされましたけど、戦略的に重要な理科と算数において、その専門の先生をつくり出そうとしている、スペシャリスト。というのは、そのレベルを上げていくために、それを専門にやっていた人がいいだろうという発想です。リー先生は逆に、それは全人教育の視点から多分批判的なんですよ。

荻谷 続きを聞くか、シムさんにちょっと市川先生の質問を併せてまずいったん答えてもらって、それからもう一回質問でいいですか。じゃ、シムさん。

シム 非常に簡単なんですけど、僕はずっと高校を見ているので、今おっしゃったようにまず設備が違う。それから、専門学科下位校を見ても非常に古い機械を使ったり、企業がやってくれるだろうという先生の説明があったんですけど、でも今の世の中では多分企業はやってくれないかもしれません。シンガポールのITEは、今、写真がないですけども本当に非常に、ここはホテルかと耳塚先生も非常に驚いたように、設備もいいし環境もいいし、勉強したくなるような環境があります。

非常にプラグマティックなコンクルージョンですけども、つまりお金ですね。国のお金のかけ方が違います。シンガポールの文科省は国防省に次ぐバジェットをもらっているのに、

日本の文科省は多分トップスリーにも入っていないと思います。この間、ちょっと調べたのですが、日本の場合、お金をたくさんもらっている省庁は厚生労働省、総務省、あとは財務省と国土交通省ですね。ですから、基本にお金のかけ方が違うと私は思いました。学校にコンピューターが少ないのもそのためだろうと。

荻谷 高校については、リー先生はいいの？

リー (英語による発言)

恒吉 I T Eのデベート、下位校ですよ、すごく難しい、いろいろな面があって、それでシンガポールにおいても、結局それほど若い年齢で、小学校からですよ、EM3というのは下位ですよ、そこからノーマルテクニカルに行って、そこからI T Eに行くというストリームができていく。それが、これほど若いところで決まっていくべきかどうかと非常に議論のあるところで、確かに仕事はある、だけど要するに良い技術者になる、テクニシャンに、技術職みたいなものがある。

むしろ、市川先生のあれじゃないですが、シンガポールではもっと長い、要するにあとになるまでアカデミックなゼネラルな、そういう教育を与えるべきなんじゃないかということも言える。

それで、確におっしゃったように、要するに技術志向というか、非アカデミック志向というか、その傾向がある生徒がアカデミックなカリキュラムの中で苦勞するという面はあるけれども、それはアカデミックなカリキュラム自体に合わないのか、それともわれわれ、要するに自分たちなんでしょうけども、われわれがまだ伝統的なやり方でアカデミックカリキュラムを教えるために、そういった生徒たちに通じるすべをまだ持っていないだけなのかというようなことをおっしゃっていました。

それから、シムさんの結果に関して、アスピレーションが高いという話がありますが、どういう意味でのアスピレーションだということを問われていますね。それがポリテクニクに行きたいというアスピレーションなんですね。だけれども、リー先生いわく、I T Eのカリキュラムは必ずしもポリテクニクに向いているカリキュラムではない。それで、結局、下位ストリームに乗っていくと、レベルがすごく低くて、余程のことをやらないと、要するにロックインされていくということですよ。そこから移れるといっても、実質は移れないということですよ、上位コースに。

それで、そうした問題がかなり問題になって、それで下位コースに行ってもアカデミックなほうのストリームのコースを取ってもいいとか、そういうようなこともなされるようになっている。

それで、例えば時間を多くあげれば、何年間多くあげれば可能かもしれないけれども、それはやっぱり年齢的な問題もありますよね。だから、決して解決された問題ではないということをおっしゃっています。

苅谷 じゃ、一応今のところで第1ラウンドの質問についてお二人から答えていただきました。もし今のに関連して引き続き、ご質問やコメントがあればそれを伺って、もう少し回しますが、いかがでしょうか。

―― 先生方もいらしてますよね、もし、あれだったら。

―― 最後、一言。

苅谷 あ、いいよ。

―― (英語による発言)

苅谷 日本語で、今のを。

―― 私がこの質問をした理由というのは、同じような方向性を日本でも出しているのだけど、日本ではモチベーションが低くて、シンガポールでは高いみたいな状況があって、じゃ、それはどういうことから来ているのですかと今お伺いした時に、お答えとして環境が違うんだとか、システムの違いみたいなお話はあったんだけど、じゃ、授業がどう違うのかとか、それはそれぞれの教科でどういうふうに生かされているのかみたいなことが分からないと、けっこう授業で、日本でいきなり生かす、シンガポールからいいことを聞いた、じゃあ、やってみようというのには難しいんじゃないのかな。

リー (英語による発言)

恒吉 あれだと思うんですね、今おっしゃっていた、それぞれの具体的な教科で、その「考える力」というのは結び付いていて、例えば算数だと問題解決とかプロセスを重視するとか、線路図みたいなものを使ってモデルメソッドという名前が付いてますけども、文章題ですね、

絵を描いてみる、特に文章題とかが、****だとルーチンじゃないようなものを使った方法だとか。それが、一つの「考える力」と結び付けられて導入されている方法ですよ。

社会科などでは、インクエリーですよ、要するに質問を聞いて、オープンエンドで聞いて、それでそれをやらせたりとか。教師は資料だとか、どうやってそれを手に入れるとか、インターネットでどうやって手に入れるとか、そういうような方法とかルートを示して、それで調べ学習をさせる。それをグループで活動したり発表したり、その辺は似ていると思います。日本と非常に似ていると思いますが、そこにITがすごくかぶさってくる、一つちよっと違うんですね、多分。発表はいつもITを使っています。

それと、多分、これ、付け足すと多分、非常に体系的にやるわけですよ。中央集権的だから、国家の方針、先程おっしゃったように国家の方針があればやらなきゃ駄目なんですよ。NIEは唯一の教師教育機関で、そこから出てくるメッセージは統一されているんですね。

それで、あと、アセスメントの問題がありましたけど、それに合わせて入試が変わるわけですね、テストが変わるわけだから。資料をベースにしたイグザムを入れたりとかいうように、「考える力」だとなるとそれに合わせたテストというかたちになっていく。

それから、マクロ要因があって、まだ教育こそが上昇していくルートなんですよ。非常に重要なわけですね。

シム あと、日本の教師訓練がどうなっているか分かりませんが、シンガポールはやろうと思ったら本当に全員が訓練を受けることになるんです。

恒吉 スクールティーチャーは何人ぐらい・・・。

リー (英語による発言)

恒吉 NIEでとっ替えひっ替え、いろんなプログラムをやる、校長のあれとか、次々訓練していくんだよね。

リー (英語による発言)

恒吉 3万とか、そういうぐらい。だからとっ替えひっ替え、みんな研修させるのね。

苺谷 国の規模が違うからね

シム あと先程、教科評価のモードが変わったとリー先生がいましたが、去年の小学校修了試験の問題についてもけっこう議論があったんですよ。僕の姪も受けたんですけども。オープンアンサーの質問で、例えば「2階建てのバスの2階に立つのは危険だ。なぜだろう。それについて論じろ」という質問に小学校の生徒が答えるのです。正解はないです。みんな、例えば摩擦力の問題とかいろいろ自分で考えて解答を書きます。それで、親たちはすごい怒ったんです。学校のシラバスにないものをなぜ試験の問題に出したのかと。でも、僕はこういう新しい出題のあり方には賛成です。そういうアセスメントがあると、教師たちも大体どういう問題がこれから出てくるのかわかってくるから、教え方をそれに合わせるように徐々に変えていくと私は思う。やっぱり評価が重要だと思います、出口のほうで。

恒吉 そうですね。それから、私立セクターというのは基本的に幼稚園の段階ね。

シム はい。

恒吉 ですよ、だから、そこと公立セクターになる小学校以後の連携というのはすごく問題になるんだけど、それ以後というのはある意味では公共が掌握しているわけですよ、だから、それも多分大きなあれかな。

苺谷 ほかに質問は。

カシミヤ こちらの大学院の修士1年のカシミヤです。私はこの3月まで中学と高校で教師をしていまして、シムさんの、とにかく下位校では授業が面白くないと、楽しくないとアスピレーションも上がらないというのはとても痛い話で、そこからしか変わらないと思うんですが、下位校で、中学でも高校でもそうですけど、一番困っていることは問題行動にかかる時間です。それにかける、1年間に100件ぐらい問題があるという、そういう状況の中でそれ以上に授業を変えるというところに力をそそげないでいるわけですが、シンガポールで特にそういうビヘイビアプロブレムとかコンフリクトに対する対応で、何か学校ぐるみでとか、あるいは国でしている、そういうものを予防しているということなんですが、それを教えていただきたい。

それとあと、リー先生には、その教師改革の中で先生たちもいろいろな納得できる面と戸惑いと両方あると思うんです、その両方を。

荻谷 これはシムさんに。

シム これは、この調査では確かにだれからも同じことを聞きました。つまり、下位校の先生は本当に問題行動に対して時間を取られてばかりで、本当に授業を面白くさせようという余裕もないというのが現状みたいですね。でも I T E には、イツ・ジ・エンド(**It's the end**)と言われたぐらいだから、行く人たちのプロフィールもかなり問題行動を起こしている生徒もいなくはないです。

ただシンガポールの感覚としては、僕は I T E の本部で働いていましたので、すべての人が救われるとは思いません。でもせめて救える人は救おうというのがあって、つまりアスピレーションが上昇したとしても全員が上昇したわけではないです。進学アスピレーションが高いのは、せいぜい生徒の 7 割ぐらいです。実際に行けるのは 3 割ぐらいで、だからせめて、ここが最後じゃないよというのがありますね。だから問題行動を起こす生徒もいなくはないです。

荻谷 あと違うのは、さっきの説明、途中でありましたけど、進学率が下の 10 パーセントは行ってないんですよ。日本の高校進学率、97 パーセントでしょう。その最後の 7 パーセントぐらいのところがあるか、ないかというのは、そういうところがいろんな学校に散らばるわけじゃなくて集中的にいるわけでしょ、高校。だから、けっこうボトム 10 パーセントがないということは、日本の現実と比べるときに、今の問題行動から言うと、そこがちょっと違うのかもしれない。

カシミヤ そこは特別に予防とか、学校ぐるみでポジティブな取り組みはしてないのですか。

シム もちろんカウンセラーも必ずいますし、あと、昼休みの時間に周りを回って、たばこを吸っている生徒をいろいろ指導したりとか、そういうことを I T E の先生もやっています。忙しいです、I T E の先生は。

リー (英語による発言)

シム I T E は厳密に言うと高校ではない。

リー (英語による発言)

恒吉 つまり、要するにちょっと段階が違うんだよね。ジュニアカレッジが高校というふうになるのかな。

シム はい。

リー シニアハイスクール。

恒吉 ちょっとその層が10パーセントぐらいずれるという話をしている。ただし、どのあれでも問題行動というのが見られるわけで、カウンセラーだとか、学校の派遣だとか、学校の外の例えば教会などでカウンセリングをやって、その教会がその学校にサービスを提供するとか、そういう外との連携ですね。あと、生活指導チームと言うのかな、もうちょっと慈悲深いイメージかな。指導、何ていうの、保護。日本で言えば生活指導チームですね、それもある。あと、未成年の裁判例、少年院に行って、それを集中的に引き受けるような学校もある。彼女のご主人がそういう学校に行っている。

苺谷 二つ目の質問は？

カシミヤ 時間があれなので・・・。

恒吉 リー先生、授業のビデオをお持ちだったのですね。算数とか、今まさにお聞きになって、本当、それをご覧になると非常によく分かると思うんですが、時間がないので、興味のある人はいらしていただければ、逆に言うと。

苺谷 あともうお一人ぐらい、どなたかご質問があれば、どうでしょうか。特によろしいですか。これが終わってから、お茶を一緒に飲む時間があるの？

恒吉 そうですね、もしあれだったら、授業を見たいとか、お声をかけて。

苺谷 もし、終わってから残っていただいて少しお話するぐらいで。私はディスカスタントなんですが、ディスカスタントのコメントなしで。すいません、もうそろそろ時間が来たので。ただ二つ、実は印象深いことを、印象を受けました。お二人のお話をどう結び付けるかということを考えてんですけども、一つはやっぱりリー先生のお話の中でも新しい試みということで、日本でもやっているようないわゆる「新しい力」を着けようという話があるわけですけども、その一方でストーリーミングは依然として残っていて、試験の仕組みというのはあまり変わっていない。

そのときに新しく育てようと思っている力というのは、そういうストリーミングで使われるようなテストで測られている学力とどういう関係があるのかというのは、多分シムさんのデータで出てくるいろいろな授業の面白さとか勉強への意欲とかということとも関係する問題だというのが一つです。

つまり、やっぱりどんな国でもある程度そういう知識をベースとしたラーニングと、それから新しいスキルみたいなもの、コンピタンスみたいなものとの間にはコーリレーションがあるんじゃないかという疑問を持ちました。

それからもう一つの問題はそれとも絡むんですが、やはり最後のリー先生のお話でもアクセスの問題や、それからインカムギャップの問題が出てきて、シムさんの所のデータでも、これは下位校と呼んでいますけども、どういう生徒たちなのかというと、ここには明らかにソーシャルバックグラウンドの差がある。

ただ、ここで非常に興味深いのは、日本の場合にはその子たちがレフトアウトされたままなのに、シンガポールではその子たちがもう一回インクルードされているというところの違いであって、そのことはもしかすると、小中学校レベルのこういう教育改革とは別に、IT Eのような、これは市川先生がおっしゃったことと関係するんですが、非常に職業的なレビューバンスと結び付いているような教育のほうがむしろ有効なのかもしれない。

それを途中で、リー先生のお答えの中に、今までのトラディショナルなアカデミックな教え方を採っているから、なかなかそれができないのだというところに、いつもわれわれは教育の議論をするとそこに答えを求めたがるのですが、本当にそんなものはこの世の中に存在するのか。

今日の話も比較的エリート層の話の中では、非常にうまくいっている。クリティカルシンキングの力もついてくるし、おそらく日本の高校生も同じなのかもしれないのかもしれない。一方で、特にこういう階層が低くて、ある職業的オリエンテーションしか持てない子供たちにとって、そんなマジックハンドみたいな、アカデミックな、教え方を変えればずっと18歳ぐらいまでアカデミックな科目でみんなが意欲を持って学び続けるなんてことがあり得るのかどうかというのは、ちょっとこれは、私は日本のデータと比べたときに考えておかなければいけないものだと思います。

一応これで、教育研究創発機構公開研究会を閉じたいと思います。お二人にはこの後も残っていただきますので、ご質問のある方はこちらでどうぞ。ありがとうございました。(了)